

仙台城跡追廻地区発掘調査（第4次）遺跡見学会資料

伊達家の重臣 片倉家仙台屋敷を発掘する！

仙台市教育委員会 平成24年12月9日（日）

〔調査理由〕青葉山公園（仮）公園センター建設
〔調査面積〕1,500㎡

〔調査期間〕平成24年7月18日～平成25年1月上旬
〔調査主体〕仙台市教育委員会 担当：文化財課・(株)テイケイトレード

○かつての追廻地区はどんな場所？

追廻地区は仙台城の一部とされ、広瀬川沿いには石垣が築かれました。城下絵図では最も古い『正保絵図』（1645）を見ると、地区の北側は「侍屋敷」、南側は「馬屋」となっており、近世を通してここは馬に関わる家臣の屋敷や馬場などがあった場所とされています。17世紀後半の寛文年間にはここに佐沼領主で奉行の津田景康（玄蕃）の屋敷がありました。

明治に入ると陸軍により追廻の南の川原が埋められ、この地区全体が軍の練兵場や射撃場となりました。

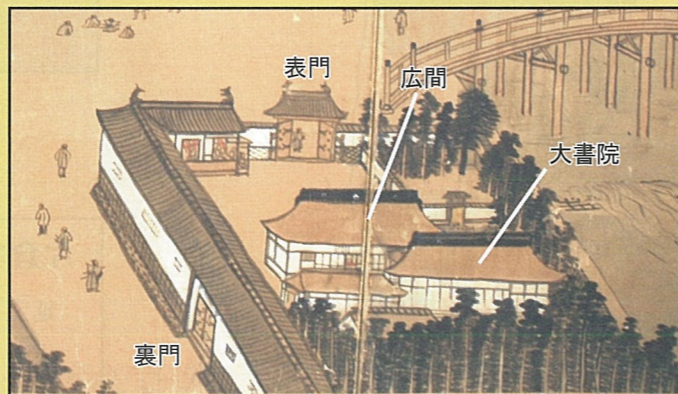


追廻地区を上空からみたところ（北東から）

○「片倉家仙台屋敷」ってなに？

片倉家仙台屋敷とは伊達家の重臣で白石城主の片倉家が仙台の追廻に構えていた屋敷のことです。寛文事件（伊達騒動）後の延宝5年（1677）、片倉家3代当主の片倉景長（小十郎）は屋敷替えにより片平丁から追廻に屋敷を移しました。以後この地は片倉家の仙台屋敷として使用されました。幕末の弘化3年（1846）には火災により屋敷が焼失しましたが、3年後の嘉永2年（1849）には再建され、藩主を迎えたことが『治家記録』や『片倉代々記』の記録からわかります。

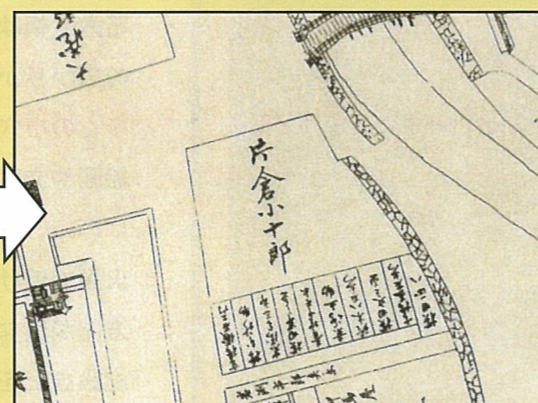
現在残る絵図をみると、表門は北側の通りに面し、長沼に面する西側の通り沿いには長屋や裏門がありました。表門を入ると玄関を伴った広間があり、その南東側には最も重要な建物で儀式や家臣との対面を行った大書院や小書院があり、表側の建物が格式高く配置されていました。南側には様々な部屋や台所など生活するための建物が複数あり、これらの建物と長屋の間には広い空間がみられます。また屋敷の南東側には中島のある大きな池がみられ、南西側には馬屋が置かれていました。平成19年度に実施した試掘調査では屋敷の池の北岸に組まれた石組を確認しています。



『仙台城下図屏風』にみる片倉屋敷 慶応元年（1865）



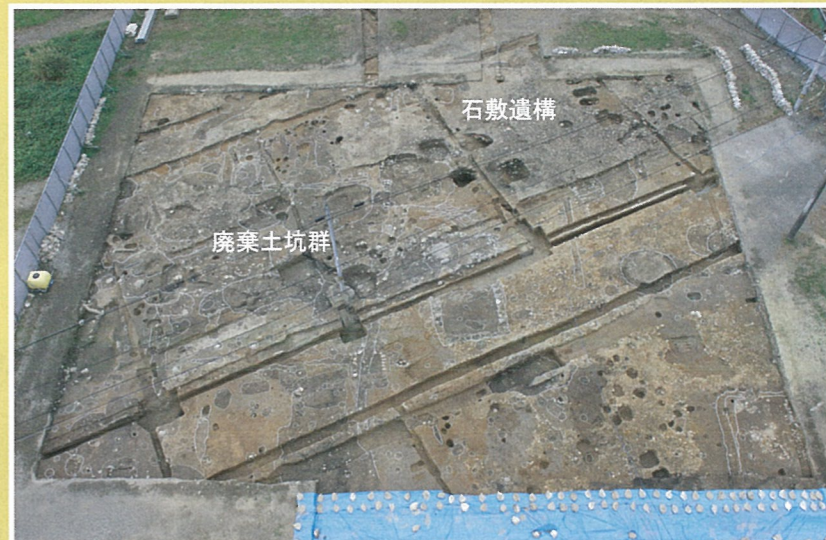
『仙台城下絵図』寛文8・9年（1668・1669）



『仙台城下大絵図』延宝6年（1678）～8年（1680）

○今回の調査で発見したもの

調査では練兵場の整地土の下に2面の石敷遺構とその下から数多くの大型土坑群、さらに土坑群より古い掘立柱建物跡、石組遺構、溝跡、塀跡、整地土などの遺構を数多く発見しました。土坑群は火災で出た廃材を埋めた廃棄土坑（ゴミ穴）とみられることから、発見した遺構は屋敷の火災を境に前と後の時代に分けられます。



発見した屋敷のあと（東から）

【火災後に再建された幕末の屋敷のすがた】

●石敷遺構

西半部の広い範囲に重なった二つの時期の石敷遺構を発見しました。それぞれの石敷きの下には厚さが3～10cmの整地土を敷いています。石敷きの上部は後に削られています。全体に礫は小粒であたかも整地土の上に貼り付けられたようです。また廃棄土坑の上に残った石敷きが一部で窪んでいましたが、これは下の土坑に埋めた土の沈下が理由とみられます。

●2号礎石建物跡（SB2）

中央部の廃棄土坑の上で東西に並ぶ4つの礎石の基礎を発見しました。礎石は残っていませんが、基礎の穴は径が50～80cmの円形で、中には拳大の川原石が数石入っています。柱の間隔は1.9m程度（6尺3寸）です。西端のものの上には石敷遺構が敷かれていることから、この建物は火災後で石敷きが敷かれるまでの間に建てられたとみられます。

●1号井戸跡（SE1）

井戸枠や壁に組んだ石などは確認できませんが、投げ入れられたとみられる用途不明の木製品が出土しました。

【火災後の処理にかかわるもの】

●廃棄土坑群（ゴミ穴）

中央から南側の広い範囲で数多くの大きな穴（土坑）を発見しました。形は円形や楕円形で、大きなもので10m程度もあります。中には多数の瓦や木片・岩のほか、炭などがまとめて埋められています。すてられたものの多くが火を受けていることから、土坑は屋敷の火災で焼けた瓦や建物の部材などを処分するために掘られたものと考えられます。

●火災直後に敷いた整地

東側で炭と焼土を多く含む整地を発見しました。整地は火災後の屋敷の地面を整備するための造成とみられ、これらの整地には廃棄土坑を掘って出た土が利用されたと考えられます。

【火災前に存在した屋敷のすがた】

●1号礎石建物跡（SB1）・4号掘立柱建物跡（SB4）など

1号建物跡では11基の礎石を発見しました。礎石は径が25～50cmで基礎の穴も小さなものです。柱の間隔は2m程度（6尺5寸）です。建物の北側には屋根からの雨を受ける雨落ち溝があります。4号建物跡は方形の柱穴が1.2～1.3m間隔でL字型に並ぶもので、隅の開きがやや広いことから、建物以外に塀跡の可能性もあります。

●石組遺構（SX3・SX4・SX5）

SX3は形が長方形で、大きさは東西7.4m、南北3.8mで川原石を壁にしています。自然に埋まった様子がみられ、中央南側には幅1.7mの島状に地山が残された部分があります。周辺には同様の特徴を持つ方形で小型の石組遺構が2基ありますが、これらの石組遺構は池か何かの目的で水を溜めた施設とみられます。

●溝跡・塀跡

南半部を中心に複数の方向で発見した溝跡は建物周囲を巡る雨落ち溝跡とみられます。また1号塀跡は内部の壁際に短い間隔で柱が立てられ、人為的に埋め戻されています。

●最も古い整地

東側において礫や砂により窪地を大規模に埋めています。今回の調査では最も古い遺構とみられます。



屋敷の西側に敷かれた石敷き（北から）



火災後に建てられた建物（2号礎石建物跡）



上半分を埋められた井戸（1号井戸跡）



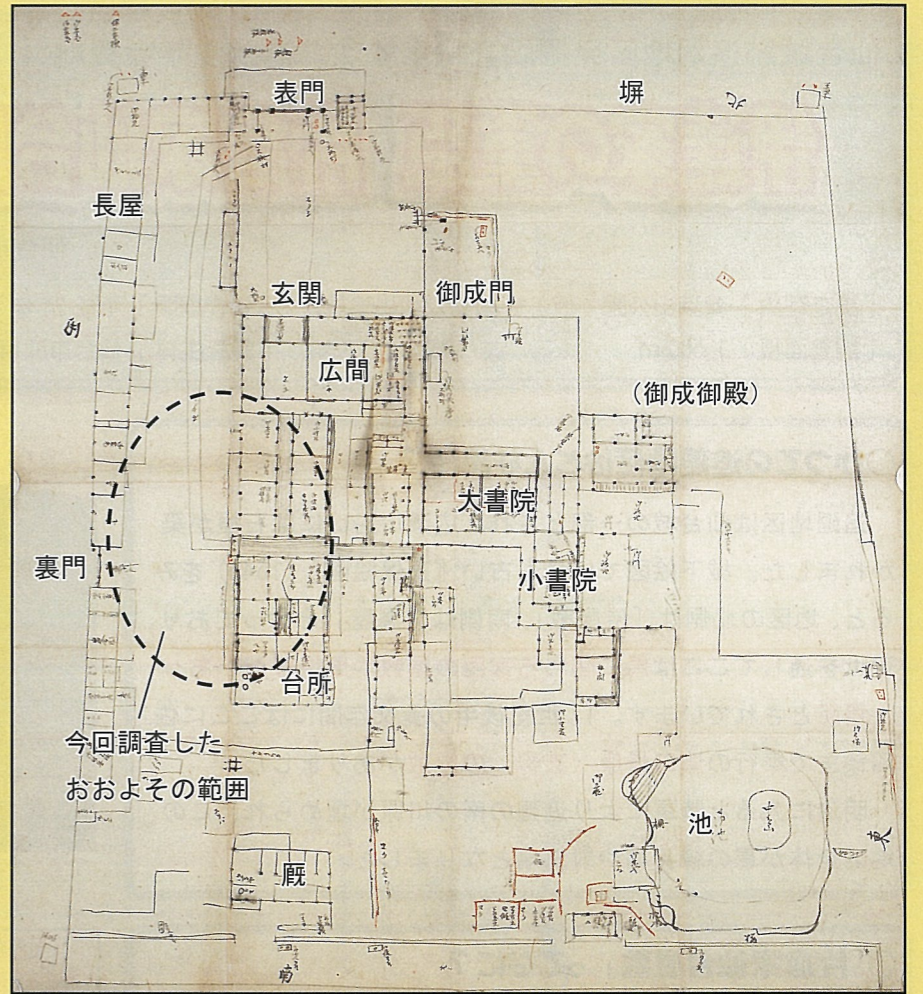
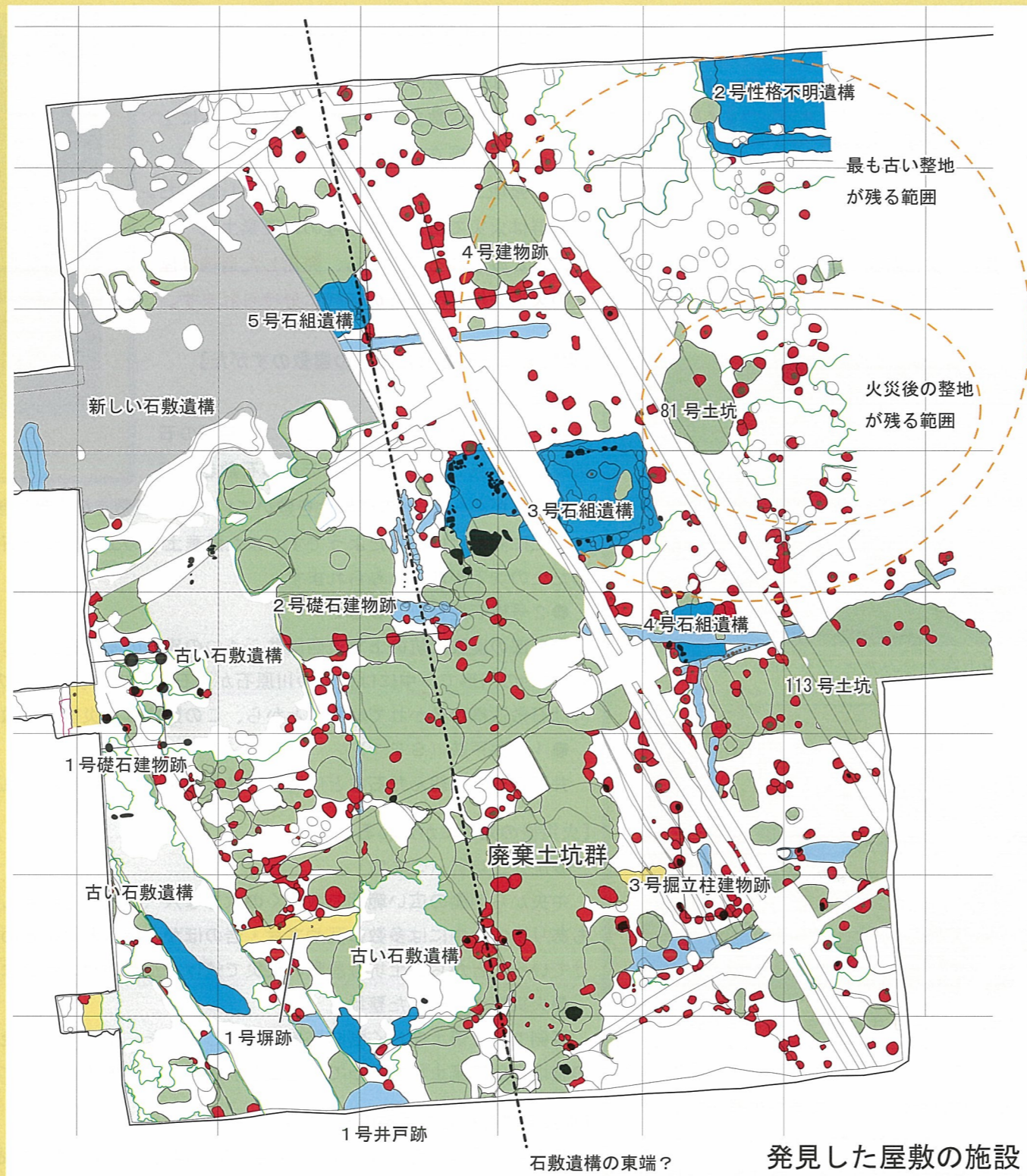
火災後に廃材などを埋めた土坑（81号土坑）



火災前にあった屋敷の建物（1号礎石建物跡）



火災前にあった屋敷の池？（3号石組遺構）



名称不明（御成絵図）嘉永2年（1849）頃
※屋敷が火災にあった後、藩主の御成りの様子を描いたもの

片倉家仙台屋敷関係年表 『治家記録』・『片倉代々記』による

- 延宝5年（1677） 大手（追廻）の津田玄蕃屋敷に屋敷替え
- 延宝7年（1679） 屋敷が完成し移る
- 延宝8年（1680） 4代藩主 伊達綱村が御成り、屋敷の完成を祝う
- 弘化3年（1846） 追廻の火災により屋敷が焼失する
- 嘉永2年（1849） 11代藩主 伊達慶邦が御成り（3/3）
新たな屋敷が完成する（3/29）

○ 調査のまとめ

- 石敷遺構は幕末の火災後に再建された片倉屋敷の西側に敷かれたもので、その広がりからも片倉屋敷の格式の高さがうかがえます。また東側で発見した多くの小穴はこの屋敷の建物の一部と考えられます。
- 絵図や文献から片倉屋敷の火災が幕末の1回のみであることから、**廃棄土坑（ゴミ穴）**を掘り、廃材を埋めた時期はこの火災直後と考えられます。
- 火災で焼けた建物などの詳しいことは不明ですが、火災より古いものとして、方向が異なる数時期にわたる建物跡や屋敷内を区画した塀跡、何らかの水利施設などを発見しました。これらは片倉屋敷の絵図にはみられないことから、**火災前の片倉屋敷や、片倉家以前の屋敷の跡と考えられます。**